初年次導入教育テクスト『知のナヴィゲーター』作成の試み
——文学部のスタディ・スキルズ養成授業にもとづいて——*

品川哲彦
田中俊也
中澤務
本村康哲
森貴史
森部豊
渡邊智山

0．文学部の初年次導入教育「知のナヴィゲーター」をめぐって

関西大学文学部で，藤田高夫先生のコーディネイトによる「知のナヴィゲーター」（以下，「知ナヴィ」と略記）という初年次導入教育[1)]が始まって，平成18年度（2006年度）で３年目になる。この間，クラス数が11から16に増えたり，文学部から研究費を援助されて，関西国際大学や金沢工業大学の大学・授業見学をおこなったり，担当者全員の執筆による教授マニュアルおよび研究調査報告書が作成されたりと[2)]，順調に進展してきたといえるだろう。

さらに平成18年度には，関西大学重点領域研究助成・研究領域Ｂ：「大学における教育と研究」による研究助成を受けると同時に，前年度に発行した教授マニュアルと研究報告書に着目したくろしお出版から「知ナヴィ」の教科書作成のオファーを受けた結果，「知ナヴィ」教科書執筆を目的とした研究会がスタートしたのだった。すでにこの関連で，2006年12月３日に開催されたくろしお出版と関西国際大学の共催によるシンポジウム「多様化する初年次教育—教師の関わり方についての可能性を探る—」において，関西国際大学や高千穂大

学とならんで，本研究会のメンバーである中澤務が本学文学部での初年次導入教育の取り組みとテクスト作成のコンセプトを発表している。

本稿は，研究会での報告をもとに，「知ナヴィ」教科書の内容を模索した軌跡を報告するものである。

1．初年次導入教育の教科書・参考書の分析

われわれの「知ナヴィ重点研究会」（便宜的にそう呼んでいた）は当初，数名の担当者によって，初年次導入教育のテクストについての内容や特徴の考察が報告されるものであったが，のちには，「知ナヴィ」教科書の目次および内容を確定していく場として機能した。

研究会は，5/13，5/20，5/27，6/10，6/17，7/13，10/25，11/18と8回，ときにはくろしお出版の編集者も参加しておこなわれた。このほか，カナダのトロントで開催されたFYE（First - Year Experience）の国際会議への参加，アメリカのサウスカロライナ大学のFYE研究所訪問，文部科学省主催による東京での導入教育の講演会，神戸で開催された関西国際大学の導入教育をめぐるシンポジウムに参加して，資料や情報を収集したことも記しておく。

知ナヴィ重点研究会で検討された初年次導入教育のテクストは，以下のとおり。

・学習技術研究会（編）『知へのステップ』，くろしお出版，2002年
・北尾謙治ほか『広げる知の世界　大学でのまなびのレッスン』，ひつじ書房，2006年
・小原芳明（監修），玉川大学コア・FYE教育センター（編）『大学生活ナビ』，玉川大学出版部，2006年
・小笠原喜康『インターネット完全活用編　大学生のためのレポート・論文術』，講談社，2003年
・井出翕・藤田節子『レポート作成法：インターネット時代の情報の探し方』，日外アソーシエイツ，2003年

・石坂春秋『レポート・論文・プレゼン　スキルズ：レポート・論文執筆の基礎とプレゼンテーション』，くろしお出版，2003年
・上村 和美・内田 充美『プラクティカル・プレゼンテーション』，くろしお出版，2005年
・大島弥生・池田玲子・大場恵理子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂『ピアで学ぶ大学生の日本語表現－プロセス重視のレポート作成』，ひつじ書房，2005年
・松本茂『日本語ディベートの技法』，七宝出版，2001年
・安藤香織・田所真生子（編）『実践！アカデミック・ディベート』，ナカニシヤ出版，2002年

それぞれのテクストについての報告は，**①内容，②特徴，③考察**の３点に絞っておこなわれた。その概要を以下に掲載する。このなかで『知へのステップ』だけは，本文を２回に分け，ワークシートと教授用資料も別に分析している。というのも，もともと「知ナヴィ」授業を立ち上げるさいに，このテクストが最初に担当者全員に配布されたものであったことと，くろしお出版編集担当者から，この書の続編を意識した内容を目指してほしいとの打診があったゆえに，われわれにとってはマイルストーン的な位置にあるからである[3)]。

・学習技術研究会（編）『知へのステップ』，くろしお出版，2002年，第Ⅰ－Ⅲ部

①第Ⅰ部・第１章では，大学で「学ぶ」のに必要な力＝スタディ・スキルズを，「聴く・読む・調べる・整理する・まとめる・書く・表現する・伝える・考える」の９つに分類して，その概略を述べる。それを踏まえ，第Ⅱ部・第２章「ノート・テイキング」は，大学における講義のノートのとり方について，(1) スキル (2) 心構え (3) じっさいのノートの取り方に分けて解説する。第３章「リーディングの基本スキル」では，まず「下読み」の方法（テキストの種類・概要難易度の把握，および未知の語句と接続詞のチェック）を示し，そのうえで「分析読み」をレクチャーする。第４章

「より深いリーディングのために」では，より深く読み込むスキルとして，「要約」の作成を実践的に提示し，さらに自分自身の感想・意見をもつことの必要性を説く。第Ⅲ部では，「調べる・整理する」について，3章にわけて説明する。まず情報収集を「事項調査」と「文献調査」に分け，さらにその収集手段として大学などの図書館を利用する方法（第5章「大学図書館における情報収集」）と，コンピューターを利用する方法（第6章「インターネットによる情報」）にわけて説明。最後に，第7章「情報の整理」でエクセル（マイクロソフト社）を使った情報の整理方法と，文献リストの作成方法を提示している。

②本書は，高校と大学での生活・授業などに見られるギャップを，なるべく緩やかに移行させていこうと大学生としての自覚から説き起こし，大学の講義の理解に必要不可欠なノート・テイキングとリーディングのスキルを紹介するといった順序で展開される。また，学生が自習用に使用しても，問題なく入っていける内容である。文章の表現が平易であるのも特徴である。

③本書は，大学教育における導入過程において，教育者の側も受講生の側にもじゅうぶんに利用価値がある。概して大学における教育は，各教員の専門性にもとづき展開されるのが一般的であるがゆえに，スタディ・スキルズを専門に教授する土壌やノウハウがじゅうぶんに蓄積されてこなかった。現在は，過渡的段階にあると考えることができるが，その状況において本書のような具体的ノウハウを示したものは，教育する側・受講する側ともに有益である。また，本書の文章表現のやさしさは，大学新入生にもとっつきやすいであろう。

一方，比較的理解力のある学生には，物足らない点もあるかもしれない。表現のやさしさは，その反面「幼稚」であるとも受け取られかねない。その意味において，類似の入門書に，「レベル」に応じた複数のものがあってもいいかもしれないだろう。

第Ⅳ－Ⅴ部

①第Ⅳ部では，アカデミック・ライティングの基本と，パソコンを使ったライティングが取り上げられている。第８章「アカデミック・ライティングの基本スキル」では，レポートとは何かという基本的な事柄が解説されたあと，スケジュールをたて，情報収集し，構成を考えて，じっさいに執筆するという，レポート作成の基本的な手順が詳しく説明される。その後，「論文作法」として，引用の仕方，注の付け方，参考文献リストの作り方が解説される。第９章「効果的なアカデミック・ライティングのために」では，わかりやすいレポートを書くためのさまざまなノウハウが解説されている。第10章「パソコンによるライティング・スキル」では，ワープロを使ったレポート作成のスキルが具体的に解説される。また，表計算ソフトとの連携の仕方も取り上げられている。

第Ⅴ部では，プレゼンテーションが取り上げられている。第11章「プレゼンテーションの基本スキル」では，プレゼンテーションについて説明がされたあと，プレゼンテーションのツールについて概説し，その後わかりやすいレジュメを書くためのポイントが説明されている。第12章「わかりやすいプレゼンテーションのために」では，PowerPointのスライドを使ってプレゼンテーションする方法と，原稿を作って発表するまでの手順が解説される。

②レポート作成およびプレゼンテーションの技法を，きわめて効果的に解説している。それぞれの作業について具体的な手順を明確な指針を示し，その後，各論的にさまざまなアドヴァイスを与えており，効率的に学べる構成になっている。

③レポート作成については，(1) レポート作成の手順の明快さ，(2) 引用・注・文献リストの説明の明快さ，(3) 少子化の問題を例にした具体的な解説，などが評価できる。ただし，第９章については，分量的に少なく，アドヴァイスも少ない。プレゼンテーションについては，これをレポートの発展型と位置づけ，有機的に関連付けているところが評価できる。しかし，

12章でのパソコンの活用に関する解説は不充分であり，もう少し親切な説明が必要であろう。

ワークシート・教授資料

①「知へのステップ」の「ワークシート」と，それに対応する教授用資料として編集されたＢ５版96ページの「教師用マニュアル」で構成される。性質上紙質も厚いものとなっている。学生が手許に持ち作業するための「ワークシート」と，指導の際に指導者が利用する「教授資料」がセットになっている。

学生用のワークシートは，Ｂ４縦長，上にタイトル(テキストの対応章・ページ明記)，下に学籍・氏名の記入欄がある。要点の把握のための記述用ブランク(１，５，６，７の各章)，演習用フォーマット(２，３，４，８，９，10，11，12章）と，大きく２種類がある。じっさいに学生が記述できるだけの空間を確保し，枚数は各章で異なっている(２，３，５，６章：１枚　４，12章：３枚　７，８，11章：２枚　９，10章はパソコンでの演習のため，一括して１枚に)。教授資料は96ページの本文に加え，付属CD-ROMのパワーポイントファイルのスライドの出力ほかが22ページにわたって紹介されている。序文と，解説編，資料編から構成されている。

解説編では，12回の授業について，テキストの各章の教授用のマニュアルとして「その回のねらい」「解説」「授業展開例」という形で丁寧に記述されている。「その回のねらい」については，その回で，学習技術（聴く・読む・調べる・整理する・まとめる・書く・表現する・伝える・考える）の「学習技術」の，主にどこに力点をおくのかが明確に述べられている。また「活動のねらい」で，ワークシートで何をねらうのかを箇条書きで表示している。「解説」では，「バックグラウンド」でワークシートで使う資料の出典，テーマの意義などを解説し，「ワークシートの解説」で解答例や指導上の留意点，評価のポイント，学生へのフィードバックの方法などを指示。そのあと，その回のトピックで参考になる文献の紹介がされてい

る。「授業展開例」では，まず「運用パターン」という形で，今回の授業が演習・フィードバック，講義をどのように組み立てた指導案になっているかを図示している。90分を30分ずつ区分し，Ⅰ（演習・フィードバック→講義），Ⅱ（講義→演習・フィードバック），Ⅲ（演習・フィードバック→講義→演習・フィードバック）の３種のパターンのどれに当たるのかを明記している。その後「授業展開」で，学習内容・学習活動，指導上の留意点・資料で構成した指導案を，90分の時間を追って詳細に説明している。

②教授資料の「授業展開」では１回の授業を，時間を追った細かい「指導案」つきで，大変丁寧に構成されている。資料の構成は，一貫した構造をとり，教員側が「予習」をしっかりやれば，「誰でも」授業ができるよう配慮されている。

③教師用の指導書をつけるのは「親切」「大きなお世話」のいずれかの評価に分かれる。

なぜ，「指導書」か（教育のノービスの人も抵抗なく取り組んでもらえる，一定の水準を全体としてキープするなど）について共通認識できれば，とくに初めてこうした初年次教育に取り組んでいただく教員には便利であろう。また，教育実習経験者等，現場経験のある人には抵抗なく受け入れられる。

逆に，己の教授法・教授内容に自信のある人にとっては，稚拙な小手先の赤本，大きなお世話，ということになろう。しかし，多くはそうした教員の授業は自分の専門領域の知識の伝達（コンテンツの伝達）に走りがちであり，学生にとっては不幸な展開になる可能性がある。こうした教授資料をつけるのは，その意味で諸刃の剣である。

・北尾謙治ほか『広げる知の世界　大学でのまなびのレッスン』，ひつじ書房，2006年

①スチューデント・スキル（1-3，13），スタディ・スキルズ（4-12）の２部構成（＋CD-ROMだと３部構成）である。ページ割付は見開きページの

両端に注のスペースを配している。これによって，用語の注をすぐに見ることができる紙面となっている。ノートテイキング(4)では，講義ノート，読書ノートの取り方と両ノートの連結などが目新しい。リーディング（5）では，インテンシブ・リーディング，エクステンシブ・リーディング，スキミング，スキャニング，アカデミック・リーディングの5タイプ。情報収集（6），インターネット（7），情報の整理（9）を独立して扱っている。テーマの選び方（8），書くことの重要性（10）にもわざわざページは多くないが，1章分をさいている。また各章のさまざまなコラムは，長短があるものの，なかなかおもしろい。

②目次をみればわかるが，スチューデント・スキルとスタディ・スキルズがバランスよく構築されていて，非常にすきのない構成である。各章は「この章で学習すること」，「本文」，「まとめ」，「コラム」，「参考文献」という構成による統一もとれている。また各章をそれぞれ，注によって参照指示することで，有機的連関をはかっている。合計で19章あるうち，13章のみで13回の授業ができるようにも考えられており，残りの6章分はCD-ROMで，クリティカル・シンキング，プレイジャリズム（剽窃），インターネット情報検索などもカバーしている。執筆者全員が英語教員（！）であることも統一の一因となっており，英語学習のサポートならび留学についての資料も北尾氏のHPに掲載されている。

CD-ROMの内容については，かなりのボリュームではあるが，オンラインで北尾氏のHPに接続するようになっているらしく，インターネット著作権についての提案や，英語教育の英語で書かれたコンテンツなどもフロントページに併置されている。かなりカオス的な印象であって，画面デザインがあまり洗練されていない，個人的には使いにくい感じだ。第4章では大学講義のサンプル動画があって，それをみながら，ノートテイキングの練習をするのは，なかなかの新機軸である。PC画面の説明などがカラーになるのは，視覚的によい。第14章以降はそのままテクストの原版をアクロバット・リーダーで掲載しているのだが，横に開いて読んでいくも

のを縦スクロールで読むのは，抵抗があった。おそらくは，値段や出版社との折り合いで，削除しなければならなくなった分を，CD-ROMに掲載したのではないか。

③課題がある章とない章があるが，解答例をCD-ROMでみなければならないというのは，少し煩瑣である。プレゼンテーションの章(12)はあるが，ディスカッションやディベートについての章がまったくない。本のテクストの洗練ぶりと，CD-ROMの内容のカオスぶりでは，かなりギャップがあると感じられる。英語教育とのリンクを目指すのはよいが，その分，逆に読者層を狭めており，あるいは，「英語帝国主義的導入教育」といえるだろう。ディスカッションやディベートを取り扱っていないことをのぞけば，全体としては非常によくまとまっており，コンテンツの統一という点でも参考にできる。CD-ROMという素材をどのように取り入れるかということを考えるうえで，よいマテリアルであるといえよう。

・小原芳明（監修）玉川大学コア・FYE教育センター（編）『大学生活ナビ』，玉川大学出版部，2006年

①FYE(First-Year Experience)という導入教育プログラムのための教科書。FYEはサウスカロライナ大学付属の一年次教育機関の商標となっている。本書第7章「意思決定をする」は，ロバート・S・フェルドマン（マサチューセッツ大学心理学部教授）の著書*P.O.W.E.R. Learning*から採録している。監修の小原氏は玉川大学学長で，執筆者は玉川大学教員を中心に全16人にのぼる。ひとことでいえば，本書は，「キャリア」を獲得させるために，つまり将来の社会人になることを意識させ，自己形成，職業，就職，社会での労働を早くから自覚させる方向に収斂する内容構成になっている。スチューデント・スキルを中心とした導入教育の教科書としてはおそらく，300頁超というボリュームにふさわしい，内容と構成ともに，現時点では最も練りこまれたものであろう。アメリカの導入教育FYEを，玉川大学に合うように，移植したものであるらしく，一定以上の完成され

た到達点が感じられる。最後の「一年次導入教育を終えるにあたって」は，同志社大学教育開発センター副所長・社会学部教授の山田礼子氏が執筆している。

②上述のように，このテキストはスチューデント・スキルが中心であるので，以下は，われわれの研究に必要なスタディ・スキルズの記述を中心とする。第4章のノートテイキングは，授業内容（アメリカ南北戦争についての講義，*P.O.W.E.R. Learning* からの引用）をテキストとして掲載，この要約（サンプルも掲載されている）の討論からノートテイキングの大事さを意識させるという方法論である。そのあと，授業を受けるさいのテクニック，自己による「評価」，試験結果が思わしくないときの「再考」などがある。コンセプトマップの導入は，発想法を学ぶうえで有効だろう。第6章「情報を記憶する」の章では，SQ3R 法の紹介や，図解や視覚化の推奨部分は参考になる。第7章「意思決定をする」の「再考」における「問題設定」，「問題解決」の内容は，ディベートやディスカッションにおける学生の思考を方向づけるテクニックは，非常に参考になる。第8章「コンピューターを利用する」は，PC 使用に関するさまざまな知識が手堅く載っているが，図版が一切ないのは不親切に感じる。

③アメリカにおける導入教育の成果を日本の大学に取り入れた，スチューデント・スキル習得の好著である。多くの章の末尾には，自己評価をさせる「評価」，もう一度，学生に問題提起をする「再考」，最後の学んだことをまとめる「まとめ」という章構成になっていて，この様式を導入するのもよいだろう。スチューデント・スキルとしてみなすことができる章にも，スタディ・スキルズと共用できる要素があって，教科書作成に関して非常に参考になる部分もあった。第13章「時事問題に取り組む」の章は，メディア・リテラシーを扱っていて，われわれがディベートの章を書くうえで，盛り込むとよいかもしれない。

・小笠原喜康『インターネット完全活用編　大学生のためのレポート・論文術』，講談社，2003年

①本書は，研究テーマの設定，資料・文献の収集，レポート・論文の執筆，プレゼンテーションの方法（レイアウト），論文等の提出方法，メディア・リテラシーなど，「情報リテラシー」に必要とされる要素を網羅的に解説し，「どのように資料・文献を探せばよいのか」というスタディ・スキルの基本を概説する。とくに，インターネットのみを使ってどこまでレポートや論文が書けるのかを中心に，情報の収集から論文の執筆まで，大学生に必要とされる情報リテラシーが具体的な情報源とともに紹介され，レポートや論文を書くための方法について解説している。

②本書の特徴は，他の類似テーマの図書と比較して，どうしてそれら情報源を利用するのかという「利用のための根拠」が明記されている点にある。(1) 俯瞰的な情報・知識を得るためには百科事典・専門事典等を活用すること，(2) 情報検索に大切な検索語の選定には各種辞書（ネット上のもの）を利用すること，(3) 各種電子図書館と呼ばれるシステムを使うことで資料・文献を入手できることなど，学生の情報探索プロセスを踏まえた構成をもち，加えて，情報を得るのに「お金」が必要であるという点や，自分の頭を賢くするためには少々のお金をケチっていてはいけないという指摘など，これまであまり一般的でなかった内容を取り入れていることも特徴的である。

③情報リテラシー全体を網羅しているとはいえ，論文の執筆に必要な「引用・参照文献一覧の作製法」についての記述がなかったり，海外の情報源については記述がなかったりするなど，もう少し精査した内容が提示されれば，より良い教科書となったと思われる。情報リテラシーの能力は，論文の執筆，研究レポートの執筆という文脈だけでなく，「仕事」に活用できる能力なので，その点を踏まえた上での構成であったならばさらに良いものになっただろう。大学生読者という枠組みで本書が書かれているのだから仕方ないが，本書の内容自体，大学生のみだけでなく，一般的な人々

をも対象にできるものであるので，内容的にその辺りが考慮されなかったのは少し残念である。国立国会図書館所蔵の明治以降のすべての図書と，1974年以降の論文等がインターネットで自由に検索できるようになった状況下，それらを活用して情報探索を行うのは，大学生だけではない。大学生以外の情報探索者も対象とした総合的な視点で「情報探索」を記述する解説書が，今，情報リテラシーの文脈で求められている。

・井出翕・藤田節子『レポート作成法：インターネット時代の情報の探し方』，日外アソーシエイツ，2003年

①大きく4部構成となっている（「部」として明記しているわけではない）。まずは大学の講義の最後に出された課題レポートを仕上げる，という実例を用いながら，レポートをまとめる過程のこまかいことがらを，Webサイトの画面や研究用のカードなどの実物を紹介し，以下の5つのステップの「じっさい」を見せながら説明し，この部分の最後には出来上がったレポートをレポートサンプルの形で紹介している。

次に各ステップを「Step 1　テーマを決める」，「Step 2　文献を探す」，「Step 3　文献の入手と読み方」，「Step 4　筋書きを作る」，「Step 5　レポートを書く」と章立てして詳細に説明している。そのあと，そこまでで用いられた，図書館情報学用語の解説が7ページ分挿入され，最後は5つのステップで紹介し切れなかった引用文献の書き方，引用文献の省略記号，見学レポートのまとめ方，口頭発表のしかた，レポート自己評価チェックリスト，研究カードの整理と検索法までが付録としてまとめられている。

②まずはレポート完成に至る経過を大雑把に「実例」の形で紹介し，それぞれの下位のステップについて詳細に解説し，そこで用いられている用語をきちんと解説し，補足の細かいことがらを資料で提示するという，「初学者」を意識した丁寧なマニュアルとなっている。

③図書館情報学の観点が明確な特徴となった，レポート作成の基本的な筋道

とそれぞれのステップにおける注意事項がもれなく網羅されたコンパクトなマニュアル，といえる。大学生のみならず，それを指導する大学教員，調べ学習や体験学習を指導する中・高教師，それらをサポートする図書館職員等には大変「使える」マニュアルとなっている。

・石坂春秋『レポート・論文・プレゼン　スキルズ：レポート・論文執筆の基礎とプレゼンテーション』，くろしお出版，2003年

①大きく２部構成をとっている。第１部はレポート・論文執筆についてで，「レポート・論文執筆の基礎」と表題がつけられている。まずはレポート・論文の定義から始まり，書式・構成，執筆の手順と準備，テーマ（主題）を決めること，アウトラインや暫定目次を作成すること，と，レポート・論文執筆の準備段階を解説している。続いてじっさいの資料・データの収集方法，整理方法が紹介され，内容の入ったレポートの完成に向けて目次の詳細検討と確定，その際の原稿の執筆方法，表記法が紹介される。さらに，レポート・論文執筆の際の引用・参考のしかたが指示され，完成に向けての見直しのチェックポイントが明示されている。補足的にグラフを利用するさいの諸注意も述べられている。

第２部は「プレゼンテーション技法の基礎」という表題のもとで，プレゼンテーションの原理と基本，じっさいの準備の方法，プレゼンの実行の方法の３章で詳細な説明がなされている。スライドの構成法から配布資料の準備，説明のスピードまで，微細に配慮・紹介をしている。

とくに「原理と基本」の章では，プレゼンテーションを１つのコミュニケーション事態として，CDM 理論の紹介をしている。すなわち，受け手に伝わる情報量は，発信する情報量と等価ではないことを，C：伝えたい内容の大きさ，D：プレゼンテーション技術の大きさ，M：受け手のモチベーション・関心の大きさで表し，D と M は０から１の間の数値をとるので，伝えたい内容の大きさ（C）を一定とすればプレゼン技術と相手の関心の高さの相対的関係で決まる，と説明している。このことは，プレゼ

ン技術のみをみがいても，関心をひきつけることができなければ相手には思ったようなことが伝わらないと，本書の基本的な「哲学」を述べたものといえる。

②レポート・論文執筆とプレゼンテーションに特化したヴィジュアルなマニュアルとなっている。PPFスライド2枚分程度を1ページに配置。文章ではなく，要点の記述に徹している。

③対象は明言されてないが，大学初年次生から卒論作成学生までをターゲットにした，比較的感覚に訴える形式のマニュアルとなっている。本書を読む（見る）だけではじっさいにレポート・論文作成やプレゼンテーションをする際の細かいことは分からないかもしれないが，活字離れの世代にはむしろこうした書が受けるかもしれない。

・上村 和美・内田 充美『プラクティカル・プレゼンテーション』，くろしお出版，2005年

①本書では，プレゼンテーションを「情報伝達の手段」と位置づけ，ツール（ソフトウェア・ポスター等）を用いた表現だけでなく，生活や仕事における口頭・電話・メールなどの方法で，他者に情報を伝達するスキルの訓練を通して，アカデミック・プレゼンテーションが習得できる内容となっている。また，プレゼンテーションを3つの要素(内容：Contents・技術：Techniques・道具：Tools）と定義し，その中でも内容に重点を置き，(1) 聞き手の立場に立つ（相手の視点に立った情報の整理），(2) 論点を絞る(情報の取捨選択)，(3) 構造を明確にする(情報の構造化：「結論＋序論」→「本論」→「結論」)，といった要素にもとづいてプレゼンテーションを組み立てていく方法を解説している。さらに，(4) プレゼンテーションのサイクル（計画・準備 → 発表 → 評価 → 改善・工夫），(5) 自己評価と相互評価，(6) デジタルプレゼンテーション，(7) 質疑応答の方法，などについても触れている。

②デジタル・プレゼンテーションの説明はわずかにとどまっているが，スラ

イドの作成方法，コンテ・シートと発表原稿（読み原稿）作成等の基本的な準備方法については，必要最小限かつ適切な事例を解説している。また，デジタル・プレゼンテーションで陥りがちな過ちについても示唆を提供している。事例となっている題材は日常的であり，一見するとやさしすぎるように思われるかもしれないが，題材を扱う姿勢はアカデミックな方法論で貫かれているため，レポート・論文の執筆，学会での口頭発表等のスタディ・スキルへとつなげていくことが可能である。また，作業にはグループワークを随所に取り入れているので，学生にとっても取り組みやすく，授業への積極的な参加を促せるであろう。

③プレゼンテーションの目的は，「その場で考えを正しくかつわかりやすく相手に伝える」ことである。しかしながら，デジタル・プレゼンテーション全盛の昨今においては，PowerPointに代表されるプレゼンテーション・ツールの利用方法に習熟することが，あたかもプレゼンテーション・スキルであるかのような捉え方が一部ではなされている。しかし，ソフトウェアはあくまで「道具」であり，それを主目的としていては，プレゼンテーション本来の目的である「その場で考えを正しくわかりやすく伝える」という本質が覆い隠されてしまう。プレゼンテーションにおいて，「道具」はあくまで補助的手段であり，プレゼンテーションの主役はスピーチである。とはいえ，わが国の教育において，スピーチ教育の重要性はあまり認識されていないのではないだろうか。今後，国内外を問わず，社会のさまざまな場所において，説明・議論・意見表明等の機会はますます増えていくであろう。そのさいに必要となるのは，その場で考えを的確にまとめ，スピーチできるスキルである。プレゼンテーション教育では，このようなスキルの形成が求められる。

プレゼンテーションの指導は，われわれ教員が主要業務として日常的に行っている授業や研究発表での姿勢が問われることになる。その一方で，自分の専門とは異なる，あるいは教員自身が学生時代に経験のない教育を学生に施すにあたっては，授業運営上のさまざまな困難が予想される。そ

こで，各教員のノウハウを蓄積し共有することによって，授業運営を円滑に進めることができる。多くの教材となる素材を蓄積することも重要であるが，じっさいの演習授業においては，時間軸にそって素材をいかに効果的に配して運用していく方法がポイントとなる。つまり，授業経営パターン（指導案）の蓄積である。本来，このことについて腐心するのは各教員の役割かもしれないが，準備のために少なからぬ負担をともなうのも事実である。これを極力軽減することは，より多くの授業担当者を見込めるし，また，より発展的な授業展開が期待できるであろう。現在の初年次導入教育の推進にはこのような工夫が必要である。

・大島弥生・池田玲子・大場恵理子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂『ピアで学ぶ大学生の日本語表現ープロセス重視のレポート作成』，ひつじ書房，2005年

①大学でのレポート作成の手法を詳しく解説し，導入授業におけるテキストとして使用できるかたちにまとめられている。内容は，この種のテキストとしては標準的であり，レポートの基礎知識から始まり（1．この授業で何を学ぶかを知る），テーマ設定（2．レポートの形を知り，アイデアを練る，3．構想を練り，情報を調べる，4．テーマを絞りこみ，目標を規定する），組み立て（5．文章を組み立てる，6．組み立てを再検討する），執筆（7．パラグラフを書く，8．本文を書きこんでいく，9．引用しながら書く，10．文章・表現・形式を点検する），発表（11．発表を準備する，12．口頭発表をする）と，順序だてて解説をしている。

②次のような点が，類書と比較したときの本書の特徴といえる。(1) プロセス・ライティングの導入：実際にレポートを書いていく過程を反映させた構成であり，段階を踏みながら，レポート作成の方法を学べるようになっている。(2) ピア活動の活用：レポートの作成と口頭発表の準備において，学習者が互いに書き手・読み手，話し手・聞き手となりあうピア・レスポンスを活用している。(3)「論証型レポート」の作成に焦点をあてている。

(4) パラグラフ・ライティングの重視：１話題１パラグラフの原則で文章のユニットを作り，１つのパラグラフを「主張＋根拠（理由・証拠）」によって構成する（主張＋根拠型パラグラフ）文章構成法を提唱している。

③本書の内容はオーソドックスなものであるが，副題にもあるように，実際のレポート作成のプロセスを踏まえて段階的に学べるように構成されているので，授業での使用は便利であろう。また，本書の最大の特徴はピア活動の活用にあり，随所にピア活動を使った練習が盛り込まれている。このように，従来のテキストにはない特徴を持っているのだが，全体的にみると，未完成の感が残る。まず，内容の整理が不十分である。さまざまな説明を盛り込むのはよいのだが，詰め込みすぎで，必ずしも必要ないと思われる細かい説明も多い。また，レイアウト面でも課題が残る。全体に文字が小さすぎ，紙面の余白部分が狭すぎる。全体として，詰めすぎの感があり，読みやすさを損ねているように思われる。また，説明の文章自体も，冗長な説明が多いように思われる。もう少し内容を整理して簡潔な表現をすれば，より魅力的で使いやすいテキストになったであろう。

・松本茂『日本語ディベートの技法』，七宝出版，2001年

①日本語によるディベートの基礎知識から，具体的なディベートの仕方まで，ディベート全体についてきわめて効果的に解説している入門書。第１章「ディベートとは何か」で，ディベートの定義や，じっさいのやり方，テーマなどについて，具体的なイメージがもてる解説をしたあと，第２章「ディベートの時代」では，現代社会におけるディベートの意義が解説される。本格的な内容は，第３章「リサーチの方法」から始まり，ここでは，リサーチの方法，ブレーンストーミングによるアイデアの組み立て，問題を分析する方法，資料の収集整理など，準備段階での実践的なノウハウが解説される。第４章「議論構築の方法」では，肯定側，否定側それぞれの立論の作成方法，反駁の構築方法，プラン・代案の作成方法，質疑応答の仕方などが詳しく解説されている。第５章「わかりやすいプレゼンテーション

の技法」では，ディテートにおけるプレゼンテーションのコツが解説される。最後の第6章「ディベートの実際」では，ノートの取り方と，審査の仕方が解説されている。なお，付録として，ディベートの実際の様子を記録した「ディベート実録」が収録されていて，便利である。

②日本語ディベートの基本的な技法を手際よく解説するとともに，ディベートの意義にもじゅうぶんなページを割いて解説しており，ディベートの入門書として最適である。また，ディベートのテーマ等に関しても，詳細な具体例のリストを掲載しており，とても参考になる。さらに，立論原稿の作成の解説にかなりのページを費やしている。とりわけ，第1次原稿から第3次原稿にいたるまで，いかに立論を組み立てていくかを，具体的な原稿を掲載しながら，具体的に解説しているので，実践的にかなり参考になる。同様に，じっさいのディベート大会の内容を収録してくれているので，じっさいのディベートの様子をじっくりと確認することができる。

③ディベートの初心者がディベートについて総合的に学ぶために最適のテキストのひとつである。分量的にはさほど多くはないが，簡潔な表現で，的確な解説をしているので，とても読みやすく，かつ具体例が豊富であるので，使いやすい。ディベートを学ぶ者がまず最初に参照すべき文献として，評価することができる。

・安藤香織・田所真生子（編）『実践！アカデミック・ディベート』，ナカニシヤ出版，2002年

①日本語ディベートについて解説した実践的な入門書。まず，第Ⅰ部「ディベートの理解」（第1章，第2章）において，ディベートが持つ意義と効果について解説したあと，第Ⅱ部「ディベートの実践」（第3章～第9章）において，具体的なディベートの仕方やノウハウが，じっさいのディベートの手順に従って，順次解説される。第3章「ディベートの流れをつかむ」では，ディベートの全体的な流れが解説され，第4章「立論する（肯定側立論）」では，肯定側の立論の立て方が具体的に解説される。第5章「反

論する（否定側立論）」では，否定側の立論における反論の立て方が解説されている。第６章「リサーチする」では，具体的な資料収集の方法が解説される。第７章「エビデンスを使う」では，収集したエビデンスをディベートの中でいかに有効に活用するかが説明される。以上が，立論にかかわる部分であり，次の第８章「戦略を立てる（反駁）」では，立論に対する反駁の仕方について解説がなされている。第９章では，全体のまとめとして，じっさいの試合の際のアドヴァイスがまとめられている。第Ⅲ部「ディベートを活かす」（第10章・第11章）では，これからの社会の中でディベートを活用していくためのヒントが，教育の場面と，社会の中での場面において考察される。

②ディベートの方法について網羅的に書かれているが，単にディベートのやり方を解説したテキストではなく，ディベートの教育的・社会的意義をテーマにして，ディベートの可能性を探ろうとする姿勢が見られる。単に技術的な解説にとどまらず，より普遍的な視点からディベートについて考察をしている。しかし，それだけでなく，ディベートの指南書としてもじゅうぶんな内容を持っており，テーマや立論の仕方などについての具体例はほとんどないが，ディベートの各段階の作業の進め方などをかなり具体的に解説しており，参考になる。また，各所に「プラクティス」という，グループワークを中心とした作業を活用しており，本書の特徴となっている。

③初心者がディベートの具体的内容を理解し，実践的な作業の進め方についてもじゅうぶんな知識を得られるとともに，なぜディベートをする必要があるのかという，意味と効果をめぐっても，説得的な解説をしており，全体として，きわめてバランスのとれた内容となっている。

２．「知ナヴィ」テクスト内容の策定

以上の報告で取り上げられたテクストは，ａ．全般的なスタディ（アカデミック）・スキルズあるいはスチューデント・スキル[4]，ｂ．WEBによる情報検索，ｃ．プレゼンテーション，ｄ．ディベートの４種に大別される。これらの

うち，『知へのステップ』で取り上げられていないのが，d．ディベートである。これは，プレゼンテーションやディスカッションと同様に，学生にはリーディングやライティングといった基礎学習スキルを組み合わせて駆使する能力が要求されるからである。しかも当然ながら，授業内容もまた高度化および複雑化せざるをえない。そして，ディベートをめぐる参考図書は数が少なく，どれも本格的すぎるがために，初年次導入教育にそのまま使用するのがなかなか困難であることも明らかになった。

とはいえ，この点によって，「知ナヴィ」テクストの作成作業において，『知へのステップ』との差異化をはかることが可能になった。というのも，「知ナヴィ」授業での養成スキルには，「プレゼンテーション：調査した内容や自己の見解を口頭で発表する能力」と「ディスカッション：発表内容を的確に聞き取り，質疑，議論する能力」[5]が挙げられているからである。つまり，プレゼンテーション，ディスカッション，ディベートを中心に取り上げることが，『知へのステップ』との差異化であると同時に，「知ナヴィ」授業担当で培われた経験を活用できることを意味している。その結果，この3つのメインの能力を養成するための基礎段階としての，ノート・テイキング，情報検索，リーディング，ライティングという4つのスキル養成を「知ナヴィ」テクスト前半部に，プレゼンテーション，ディスカッション，ディベートを後半部に設定した2部構成となった。

さらに，研究会での報告で明らかになったのは，初年次導入教育用のテクストにもかかわらず，CD-ROMなどの付属教材の内容がいまひとつお粗末で，使いにくいものが多いことだ。それゆえ，模擬授業およびじっさいのディベート風景を撮影したものを簡便な参考資料として付属させることも決定された（前年度に「知ナヴィ」を履修した学生たちの協力を受けて，9月30日にすでに第1回目の撮影が終了し，2007年1月27日には第2回目の撮影がなされた）。また，書式として，各章の冒頭に学習内容と習得されるスキルを，終わりにはポイントと自己評価と参考文献を載せることにし，内容の区切りには練習問題も挿入される。そのほか，本テクストを授業で使用する担当者に配慮した教授

資料の作成も企画されている。

3．知ナヴィテクストの目次

上述でのこうした議論の成果として，執筆しながら何度も修正しつつ，最終的に作成されたのが以下の目次である。最終稿と呼べるもので，出版までに若干の修正が入るとしても，それほど大きな変更はないと思われる。

『知のナヴィゲーター　大学生活をより知的な活動にするために』(くろしお出版)
目次一覧

まえがき
本書の使い方
本書の構成と学び方
第Ⅰ部　リテラシーをみがく
第1章　ノート・テイキング
1.1　大学での学びとノート・テイキング
1.1.1　大学の授業でのノート・テイキング
1.1.2　ノート・テイキングの目的と意義
1.1.3　ノート・テイキングの2つの段階
1.2　実践的なノート・テイキング
1.2.1　予備知識としての予習
1.2.2　ノート・テイキングの工夫
1.2.3　ノートをよりよくするための工夫
EXERCISE 1　ノートを取る
1.3　ノート・テイキングの実際
1.4　理解を深めるためのノート
1.4.1　ノートを視覚化する
1.4.2　マインドマップを作る
1.4.3　マインドマップを活用する

EXERCISE 2　マインドマップを作る
第1章をふりかえって

第2章　情報をあつめる
2.1　大学での学びと情報検索
2.1.1　情報検索の重要性
2.1.2　大学の学びで必要な情報検索
2.2　様々な情報源
2.3　インターネットで探す
2.3.1　検索サイトを使う
2.3.2　蔵書検索システムを使う
2.3.3　インターネット上のデータベースを使う
2.3.4　インターネット情報の信頼性
EXERCISE 1　インターネットで情報を集める
2.4　大学図書館で探す
2.4.1　図書館の蔵書検索システムを使う
2.4.2　参考図書コーナーを使う
2.4.3　新聞・雑誌の閲覧コーナーを使う
2.4.4　関連書架をあたる：日本十進分類法
2.4.5　視聴覚資料を利用する
2.4.6　レファランス・カウンターで尋ねる
EXERCISE 2　大学図書館で情報を集める
2.5　情報倫理に配慮する
2.5.1　著作権
2.5.2　剽窃と引用
第2章をふりかえって

コラム　スタディ・スキルを活かす①　ゼミの中で

第3章　リーディング

3.1　大学での学びとリーディング

3.1.1　リーディングの重要性

3.1.2　大学生活で必要なリーディング

3.1.3　社会生活とリーディング

3.2　様々な文章とその読み方

3.2.2　様々な文章

3.2.2　様々な読み方

3.3　読解のスキル

3.3.1　文章の全体像を把握する

EXERCISE 1　全体像を把握する

3.3.2　精読する

3.3.3　文章の構造を分析する

EXERCISE 2　精読して構造図を描く

3.4　要約する

3.4.1　要約とは

3.4.2　要約の方法

EXERCISE 3　要約する

3.5　批判的に読む（クリティカル・リーディング）

3.5.1　クリティカル・リーディングとは

3.5.2　クリティカル・リーディングの方法

3.6　記録する

3.6.1　ノートやカードを作る

3.6.2　文献リストを作る

第3章をふりかえって

第4章　ライティング

4.1　大学での学びとライティング

4.1.1　ライティングの重要性
4.1.2　大学でのライティングに求められること
4.1.3　大学でのレポート
4.2　わかりやすく説明する
4.2.1　わかりやすい説明をするには
4.2.2　わかりやすい説明をするための 3 つのポイント
EXERCISE 1 わかりやすく説明する
4.3　説得力のある主張をする
4.3.1　論証文の特徴
4.3.2　わかりやすい論証文の条件
4.3.3　理由を見つける
4.3.4　5 段落で論証を組み立てる
EXERCISE 2　5 段落で論証文を書く
4.4　レポートの基礎知識
4.4.1　レポートの種類と特徴
4.4.2　レポートの構成
4.5　レポートを書く
4.5.1　レポート作成の手順
4.5.2　スケジュールを立てる
4.5.3　意見の内容を考える
4.5.4　情報収集をする
4.5.5　アウトラインを組み立てる
4.5.6　執筆する
4.5.7　点検して体裁を整える
4.6　引用・注・参考文献表
4.6.1　引用する
4.6.2　注をつける
4.6.3　参考文献表を作る

EXERCISE 3　ミニ・レポートを書く
第4章をふりかえって

コラム　スタディ・スキルを活かす②　卒業研究に向けて

第Ⅱ部　コミュニケーション能力をみがく
第5章　プレゼンテーション
5.1　大学での学びとプレゼンテーション
5.1.1　社会で求められているプレゼンテーションスキル
5.1.2　大学の学びにおけるプレゼンテーションの意義
5.2　プレゼンテーションとは
5.2.1　プレゼンテーションの種類
5.2.2　プレゼンテーションの要素
5.3　スピーチ力を鍛える
5.3.1　スピーチがすべての基本
5.3.2　アイデアの構想を練る
5.3.3　アウトラインの作成
5.3.4　読み原稿の作成
5.3.5　リハーサル
EXERCISE 1　グループスピーチをする
5.4　高度なプレゼンテーション
5.4.1　説明型プレゼンテーション
5.4.2　説得型プレゼンテーション
EXERCISE 2　高度なプレゼンテーションをする
5.5　ドキュメントを使ったプレゼンテーション
5.5.1　配布資料を使う
5.5.2　スライドを使う
5.5.3　スライドの作成

EXERCISE 3　配布資料とスライドでプレゼンテーションする
第5章をふりかえって

第6章　ディスカッション

6.1　ディスカッションの意義
6.1.1　ディスカッションとは
6.1.2　ディスカッションとプレゼンテーションの関係
6.2　ディスカッションの心得
6.2.1　生産的なディスカッションと非生産的なディスカッション
6.2.2　参加者の心得
6.2.3　司会者（ファリシテーター）の心得
6.2.4　記録係
6.3　ディスカッションの種類と目的
6.3.1　ディスカッションの種類
6.3.2　ディスカッションの目的
6.3.3　大学での学びに必要なディスカッションとは
6.4　理解を深めるディスカッション
6.4.1　イントロダクション
6.4.2　バズセッションの進め方
EXERCISE 1 バズセッションで理解を深める
6.5　問題を解決するディスカッション
6.5.1　イントロダクション
6.5.2　問題解決のためのアイデアを出し合う（ブレーンストーミング）
6.5.3　集めたアイデアを整理・分類する（KJ法）
6.5.4　ブレーンストーミングとKJ法で問題解決を模索する
EXERCISE 2　ブレーンストーミングとKJ法で問題を解決する
6.6　問題を共有するディスカッション：シンポジウム
6.6.1　イントロダクション

6.6.2　シンポジウムの進め方

EXERCISE 3　ミニ・シンポジウムで問題を共有する

第7章　ディベート

7.1　ディベートとは

7.1.1　ディベートとディスカッションとの違い

7.1.2　ディベートの意義

7.1.3　これまでに学んだスキルを総動員しよう

7.1.4　ディベートのフォーマット

7.2.　簡単なディベート

7.2.1　ピンポン・ディベート

7.2.2　ワンマン・ディベート

EXERCISE 1　簡単なディベートをしてみよう

7.3　ディベートの準備

7.3.1　チーム分け

7.3.2　論題の選択

7.3.3　主張作り

EXERCISE 2　主張とエヴィデンスを作る

7.4.　ディベートをおこなう

7.4.1　ディベートの前に

7.4.2　主張

7.4.3　質疑

7.4.4　反論

7.4.5　フローシートに記録する

7.4.6　判定

7.4.7　ディベートが終わったあとは

EXERCISE 3　ディベートをする

コラム　スタディ・スキルを活かす③　社会人になってから

索引

あとがき

執筆者紹介

4．「知ナヴィ」テクスト出版の意義

2007年3月出版予定の『知のナヴィゲーター』というタイトルがつけられた，初年次導入教育のテクストが出版されることの意義は，ひとえに関西大学文学部での3年間にわたる初年次導入教育に対する取り組みを強調し，宣伝するためだけではない。それは，本学研究支援センターから重点領域研究助成を受けた研究の一部が教科書として出版されるゆえに，本学全体が初年次導入教育に心血をそそいでいるという証左にもなっている。

東京大学の大学院生が，担当教員によってミハイル・バフチンの「ポリフォニー」論の説明がなされている最中に，「先生，ドストエフスキーって**誰なんですか？**」[6]と訊いたというエピソードが，岩波書店の『世界』2002年12月号（特集「大学－〈改革〉という名の崩壊」）に掲載されて，一部でセンセーションを引き起こしたのも，もうすでに4年前のことである（エピソード自体はさらに2年前のことだという）。この記事が話題となった4年前から，学生の学力低下に関する問題も改善されるどころか，今後はますます深刻化していくのが目に見えている。このような状況のもと，われわれの初年次導入教育テクスト作成の試みがわずかながらでも，本学全体での初年次導入教育のあり方に寄与することを切望するしだいである。

注

＊本稿は，平成18年度関西大学重点領域研究助成・研究領域B：大学における教育と研究：「初年次導入教育に関する総合的研究―学びのスキル獲得と情報リテラシーの同時獲得・

形成を目指して―」（研究代表者：田中俊也，共同研究者：中澤務・本村康哲・森貴史・渡邊智山）によっておこなわれた研究成果の一部である。

1）いわゆる「導入教育」ということばの起源は，アメリカのサウスカロライナ大学によって商標登録されている First-Year Experience であるが，日本ではまだこの訳語が定まっておらず，ほかには「初年次教育」，「一年次教育」という訳語がある。大学ごとに呼び方やこの語があらわす授業内容もそれぞれ異なることも多い。本学における「知ナヴィ」授業のコンセプトが〈初年次生対象の，専門教育へのリンクを目指した導入教育〉であるために，本稿では「初年次導入教育」という語を用いた。濱名篤「初年次教育と教育改革」，『文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」採択（平成16年度）記念シンポジウム 初年次教育を活用した教育改革の可能性予稿集』，関西国際大学，2006年，5-22頁参照。

2）知ナヴィ担当者連絡会議（編）『知のナヴィゲーター教授マニュアル』，関西大学文学部，2006年，関西大学文学部『文学部初年次導入教育研究調査報告書　知のナヴィゲーター 2004～2005―2年間の展開とこれからの課題―』，関西大学文学部，2006年を参照。

3）『知へのステップ』の売れ行きについて少し触れておくと，くろしお出版の編集者によれば，本書を出版した当初の2002年度の発行部数は，8,000部であったが，年々売れ行きが伸び，2006年度には10,000部増刷し，現在累計では40,000部を越えているとのことである。ちなみに，『知へのステップ』の執筆者は，本稿でたびたび言及される関西国際大学の教員であって，こちらの大学では，大学全体で初年次導入教育に取り組んでいる。そのため，学長の濱名篤には，これに関する著書もある（濱名 篤・川嶋 太津夫『初年次教育 歴史・理論・実践と世界の動向』，丸善，2006年参照）。

4）スタディ・スキルズ（アカデミック・スキルズともいう）とは，大学で学習するために必要な技術，たとえばノート・テイキングや文章の書き方などのスキルを指す。佐藤望（編著）『アカデミック・スキルズ　大学生のための知的技法入門』（慶應義塾大学出版会，2006年）によれば，「学問の目指すより幅広く深い教養を身につけるための基礎的技術，〈大学で学ぶための基礎的技法〉」（10頁）と規定している。

　これとはべつに，スチューデント・スキルというものが存在し，こちらのほうは，学習の方法ばかりでなく，たとえば大学でのマナーや自己啓発，キャリア・デザインなど大学生として生活するためのスキルのことを指す。後者をあつかったテクストとしては，古関博美（編著）『FYS 講座　大学で学ぼう・大学を学ぼう』（学文社，2005年）が代表的である。

5）2005年度関西大学文学部「知のナヴィゲーター」共通シラバスからの引用。ちなみに，ほかには「資料のポイントをつかむ：文献・資料を的確に読む能力」，「レジュメ・サマリーを作る：文献・資料の内容をまとめた文章を作成する能力」，「レポート・論文を書く：テーマに応じて，自分自身の見解をまとめた文章を作成する能力」，「モティベーションを高める：人文学の研究への動機づけやテーマ発見」，「図書館・コンピュータの利用技術：その他，大学での学習に必要な技術の習得」が設定されている。

6）石田秀敬「〈教養崩壊〉の時代と大学の未来」，『世界』，2002年12月号，岩波書店，215頁。